



滿洲飛行の話

北斗老星

「本會理事關東局總長岡隆一郎氏は本年一月八日東京出發赴任せられ非常の意氣を以て其職務に精進せられ客月二十四日以來飛行機を以て全滿の視察旅行を企てられた、其通信を寄せられたれば茲に掲載し讀者各位と共に其健康を祝し併せて御自愛を祈る次第である。

北 滿

第一信 哈爾賓より (二月二十四日)

どうせ死ぬなら北滿の野邊で

死ぬだかばねに雪がつむ

哈爾賓は今混亂状態である。事變の影響も、日本人の勢力の進出も、新京以南に比して一年ばかり遅れて來た。而も北鐵讓渡を前に控へて 不安と前景氣とが入りまちつて渦を巻いて居る。

元の山梨縣内務部長の佐藤正俊君は哈爾賓特別市長呂樂寰氏の下に、其の絶大な信用を得て、總務處長として、道路に、市場に、衛生に、其他の都市計畫に、敏腕を振て居られるが、同君の必死の努力にも拘らず、哈爾賓の急激な人口の増加に對應する施設をするのには豫算の關係もあり、容易な業ではないやうに察せられる。

酒仙、直木國道局長、大滿洲國全般に涉つて、大童になつて、自動車道路の設計と工事とに奮闘して居られるが、何分、廣い滿洲である。加之、冬期は絶対に工事の出来ぬ滿洲である。自動車で快適の旅行をするなどと云ふ事は、老先きの短い老生などには縁が遠い。

北滿の旅行は、何と云つても、飛行機を利用する外はない。老生は本日より旅客機を一臺借り切つて、思ふ存分に蘇滿の國境に近い北滿を飛で見やうと思ふ。之から毎日通信を御送りする。

佐藤君に教へられた哈爾濱小唄を御紹介申上げる。

一、楡のハルビン

國際列車が

花の東京と

虹のかけ橋

二、戀は七いろ

結ぶ舊哈爾濱と

仰ぎや鳴ります

みどりの都

今日も出る

巴里の空へ

中どころ

言葉は三いろ

新市街

中央寺院の鐘が

春の入日の

三、夏は埠頭よ

赤い夕陽の

むかし思へば

いとし曠野の

四、誰と來た來た

キタイスカヤの

宵はキヤバレ

弾けよ戀しの

序でに、も一つ御紹介申上げる。

一、前衛ハルビン

「日」滿「蒙」露「の」花が咲く

つきぬ曠野は 無限の寶庫

拓け青空 旭はのぼる

二、凍る松花江 流れてとけて

つなぐ歐亞の 西東

舞ふてなびくは 油房の煙か

中空に

馬家溝は秋よ

志士の碑に

涙も燃える

露しぐれ

トロイカ駛けて

夜の雪

夜あけはベチカ

バラライカ

男の舞臺

戀の旅客機

今日も飛ぶ

三、馬車でゆこうよ

傳家句へ

可愛い姑娘は

猫やなぎ

春は駆足

復活祭の頃は

バツクミラーの

片えくぼ

四、わしのハルビン

どこまで展らく

賣る大豆の

黄金やま

興安嵐も

吹雪もまよ

前衛日本の

活舞臺

第二信 海拉爾にて (二月二十四日)

朝の九時、哈爾濱の飛行場を飛び出す。同行者は岩佐少將、鈴木中佐、椎葉秘書官、鮑田理事官の四名である。定員六名の旅客機を一臺借切て居るので、残る一名の重量に當る分だけ各地の傷病名に贈る慰問品を満載した。

見送る人々の姿が段々小さくなる。振るハンケチだけは見えるけれども、顔も姿も、もう判らない。さうなると、

美人も不美人も、若老も男女も、一切合切無差別である。

哈爾濱の町を後にして鐵道線路に沿ふて西に西にと飛んで行く。氣流が宜しい爲めか、酔ふた者も一人も無い。機上でウイスキーを傾けながら、地圖を按じて展望を肆にする。飛行機には酔はぬが、ウイスキーに酔つた者はあるやうだ。

齊々哈爾を過ぎてから、興安嶺にかゝる。今迄の五百米突の高度が千米突に上る。満目たゞ白皚々たる雪の山又山。河の水の凍つて、白く光つて居るのが白蛇のやうである。

(以上は飛行機上にて認む) 四時間を飛び終つて、海拉爾飛行場に着く。茲に呼倫貝爾小唄なるものを御紹介致す。

一、東は興安、南は外蒙、西はソベート、ホロンバイル、廣い雪野に、御旗は進み、昇る朝日に、あけて行く、國の稜威は、いや榮へ。

二、ラマのかなたに、旭日は昇る、蒙古ユルタに、夜は明けて、馬や羊や、駱駝のむれが、廣い野原にちつて行く、ホロンバイルは平和境。

三、グレート、ハイラル、蒙古の町よ、松の緑の砂の丘、色とりどりの蒙古の娘、大和なでしこ、こきまぜて、朝日の御旗ひるがへる。

四、ホロンバイルは荒野ぢやないよ、千里の廣野青々と、續き續いてウラルに到る、大和男の子の住むところ、櫻植えれば花も咲く。

第三信 齊々哈爾にて (二月二十五日)

午前八時、海拉爾の呼倫ホテルを出立する。毎戸日滿國旗を掲げてあるのが恐縮の上に、町はずれには日滿要人、國防婦人會員、小學校生徒など雪の路上に整列して御見送り下される。面の皮の薄くない老星も聊か冷汗をかいた形である。

八時三十分離陸。眼下は廣漠たる蒙古の荒野原。ところどころに、ボーと稱する蒙古人の住宅が散見するだけで、人跡到つて稀である。牛や羊やラクダの群れが、時々眼下に見えるだけである。

九時半頃、滿洲里の町が見え出した。蘇滿の國境も眼下に見える。寶石山から、小原山にかけて、國境監視の警察隊が見張りをして居るところなど、手にとるやうに見渡される。

飛行士着陸を誤つて、一寸機體が飛び上る。茲で無理に着陸しやうとすると、事故を起すそうであるが、流石に熟練の賜物で、もう一度離陸。十分ばかり低空飛行して、無事に滿洲里に到着した。

滿洲里には泊るわけにはゆかぬ。大急ぎで四時間間の用事をすませ、午後一時に出立する。之からの事は實は老星一切覚えて居ない。連日過勞の疲れで、大いびきをかいて、寢て居たそうである。起されて見ると、齊々哈爾に安着して居つた。

齊々哈爾の闇に咲く大和撫子、歌ふて曰く、

忍はるゝ、ジンギスカンのおもかけ追ふて、月の砂漠を静々と、駒を止めて、ますらをが、胸に畫くや新日本。

蒙古旅び、かまぼこ馬車にゆられつゝ、行くや、千里の荒れ野原、牛や羊のむれ遊ぶ、あすはカラハンの夢枕。

新日本、北はシベリア南は滿洲、廣ぼう凡そ百萬里、無限無量の大寶庫、拓くは我等の大使命。

第四信 大黒河にて (二月二十六日)

午前十一時に齊々哈爾を出發する。本日もよい天氣である。またたく間に、拉哈站、布西、和禮屯の上空を飛び越す。事變で有名な嫩江は眼下に見える。正午に機上で、サンドウイツチを喫する。パンとパンとの間には胡瓜の漬物が、はさむであるばかり。同行の一人が、之はサンドウイツチではない。二度ウイツチだと、ひやかした。

所々に野火が燃えて、曠野を焼き盡して居る。小興安嶺山脈を飛び越えたのは午後の一時頃であると思ふ。アムールの河が見えて來た。河岸の向ふには、蘇聯側で築造した

トーチカと稱する城寨が散見して居る。大黒河の町も、ブラゴエチエンスクの町も眼下に展開して來た。數分の後に飛行場に着陸するであらう。(此の原稿は機上で認めました。大黒河にて投函の筈。)

第五信 北安鎮にて (二月二十七日)

午前八時二十分大黒河を離陸する。對岸のブラゴウエシチエンスクには多勢の蘇聯邦兵が居るそうであるが、市街は林の如くに靜である。機は五百米空の高度を保ちつゝ、瓊瓊、龍鎮の上を飛び越えて南に進む。天候はやゝ險惡になつて、風が出て來た。羽衣のやうな白雲が、機下を掠めて北へと飛ぶ。十時近く北安鎮に着いた時は粉の吹雪が飛行機を包むだ。

三月一日は滿洲國の建國記念日なので、老星は本月中旬に新京に歸らなければならぬ。北安鎮の用事が終り次第、又南下。哈爾賓でガソリンを補給して、一氣に新京に飛び歸り、三月の二日頃から、又、北滿飛行の旅を続けたいと考

て居る。

東滿飛行の旅

第一信 佳木斯にて (三月二日)

二月二十七日、北安鎮より新京に飛び歸つた老星は三月一日の滿洲國建國記念日に大同廣場の慶祝會と宮中筵宴とに出席して、御祝ひをすませ、三月二日午前八時半に、又新京を飛び出した。

東京では今頃は、梅の花が散り、桃の花が咲き初める頃であらうが、滿洲では例年よりは暖いとは云ひ乍ら、矢張り零時何度の寒さである。飛行機は千五百米突の高度を執つて東北へと飛ぶ。本日は哈爾濱には着陸せず、佳木斯に直行する、九時十五分頃、吉林の市街を右下に眺める。小姑家、拉法、馬鞍山の邊りは嘗ては匪賊の中心地であつたさうであるが、千米突以上の高さを飛んで居る飛行機には手の出しやうもあるまい。威虎嶺にかゝると

一面の森林地帯である。秋の紅葉の頃、機上で眺めれば、よい景色であるさうぢや。

額穆(今は額木素)の市街は匪賊に焼かれた後で、町の半分は荒廢して居る。十時頃に鏡泊湖を右下に眺める。

雪が段々に深くなる。土龍山は飯塚聯隊長の戦死したところである。依蘭の町は左の脚下に見える。

正午、佳木斯に着陸して、自働車で市街に向ふ。恐縮千萬な話ではあるが、老星一行警戒の任に着て居る滿洲國の軍隊及警察官が馬を一頭づゝ傍に繋で居るのには一寸吃驚した。日滿要人の御出迎へは兎も角として、滿洲國の中學校、高等女學校の生徒達が、樂隊を備へて、敷列して居られるのには、一行少々冷や汗ものであつた。

第二信 牡丹江にて (三月三日)

朝七時半、佳木斯を飛び出して南に向ふ。永豐鎮の移民地には時間の關係で立寄る暇が無いので、九時頃其の上を低空旋回飛行して、老星の心ばかりの慰問品を投下する。

かねて電話で打合はせてあつたので、移民村では毎戸、日の丸の國旗を掲げてあるのみか、住民諸君何れも小さな紙の國旗を打ち振り打ち振り歓迎の意を表して下さる。百米突ばかりの低空に降りると少年少女の顔まで、おぼろげながら見えて来る。人里離れた此の北滿の邊境に致々營々として働いて居られる諸君の心情を御察して、老星は思はず、機上で不覺の涙を流した。

次には湖南營の移民地に慰問品を投下すべく用意して居たのであるが、飛行士、方向を誤まつたためか、どうしても、其の湖南營が見當らない。「湖南營移民地發見する能はず。直に目的地に飛行したし」と云ふ紙切れを飛行士からよこす。折角の慰問品が、無駄になるが、どうも致方がない。

途中で吹雪に遇ふ事、二回、三回。飛行士から、又紙切れを渡される。「東寧に飛ぶ豫定なりしも、雪の爲め、東寧への飛行危険。牡丹江に不時着陸するの外なし」と書てある。こうなると素人の意見を申すのは危険千萬である。「萬

事御判断に任す。無理なきやう頼む」と書いて飛行士に渡す。機は右に轉廻して、まんじ巴と降る雪の中を、辛うじて牡丹江に着陸した。豫定變更の爲め、其處には自動車の準備も無い。之からトラックでも探して掖河に赴くつもりである。

第三信 龍 井 に て (三月四日)

午前八時、牡丹江を出立したが、本日は老星に取つて少々厄日の感があつた。飛行士から、先づ「國道上霧深し。行ける所まで行きます」と云ふメモが来る。少々心細くなつて居るところに「霧深く不安です。鐵道上を通ります」と云ふ紙片を渡される。おやと思つて居る間に濛々たる白雲の中に突込でしまつた。機は急に角度をあげて千五百米米の高さに昇る。白雲は最早や脚下で、上は快い青空であるが、下界は一切判らないので、機上で、⁽³⁾えらそうに地圖を按じて見ても、何處を飛んで居るのか、少しも見當がつかない。鈴木中佐が「露領に入る處なきや」と云ふ紙片を

飛行士に送る。暫くして雲間に山河が朧げながら顔を見せてる。飛行士から「小緩分河から南へ流れる河に添ふて東寧に向て居ります。露領は東方約二十五キロの地點です」と云ふ返事が来る。下界が見え出したら、急に老星も氣が強くなつた。あとで聞けば機は目標を探し出す爲めに旋廻飛行をして居たのだそうである。

九時頃、東寧の町が見え出す。對岸蘇聯側にはポルトフカの市街が見える。國境に沿ふて築造してある例のトーチカと稱する小砲臺も飛行機の上から見れば丸見えである。ゲイ・ペー・ウーの事務所の赤煉瓦の建物には制服の役人が出入りして居る處まで手に取るやうに見渡される。

老星聊か疲労して居るので、あとは簡單に致す。東寧の用事を終つた後、又牡丹江に引き返し、「龍井雪」と云ふ電報があつたが、兎も角も正午頃、牡丹江を發して圖們に着陸した。豫定の時間が狂つたので、各地官民に御迷惑と御手違ひとをかけたのは誠に申譯けないが、強辯すれば之

を老星の罪ではない。天候の罪であると申上げたい。

第四信 新京にて (三月五日)

午前中に自動車で龍井から延吉に往復して、間島に於る用事を片付ける。

「間島々と輕蔑するな。砂を掘つても金が出る」ちと大げさではあるが、間島美人の唄ふ歌である。

朝から南風が吹き出して砂塵を捲き上げる。本日の飛行も少々心細い。午後一時に龍井を出發する。鏡泊學園の移民地の低空を旋回して、慰問品を投下する。風は逆風で、かなり強い。機は左右上下に搖れて、氣持の悪い事夥しい。一行中には大分へこたれて機上にデパートを開業した者もあるけれど、御本人の名譽の爲め、名前だけは御預りをして置く。老星はビール一本を平けて、酔の力を借りて、赤兒がクレードルにゆられて寝るやうに、好い機嫌で寝てしまふ。起されて見たら、もう夕方、無事に新京に着陸して居た。(了)